

Title	ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究：伝記1
Sub Title	James Baldwin : a critical biography 1
Author	辻, 秀雄(Tsuji, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.75 (2022. 3) ,p.29- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20220331-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究

——伝記 1

辻 秀 雄

本プロジェクトは、アフリカ系アメリカ人作家ジェイムズ・ボールドウィン（James Baldwin）を主題としたモノグラム執筆を準備する基礎研究である。同書は、作家の紹介ののち、続く各章で長編を一本ずつ論じていく構成をとる。その作家紹介部にあたる伝記研究を成すのが本稿である。紙幅の関係から、ボールドウィンの誕生から1948年のパリ（Paris）への出発までを射程とした。

前半の「ハーレム時代」は出生から高校卒業までを、後半の「グレニッチヴィレッジ時代」は高校卒業後の文学修行時代を扱っている。このあとには、「パリ時代」、「公民権運動時代」、「南仏時代」が続く。作家にかかわる基礎事項を時系列に沿ってまとめながら、なるべくボールドウィンのエッセイを紹介できるよう心がけた。

ハーレム時代（1924–1941 年）

本稿の主役は、1924年8月2日、ニューヨーク市（New York City）のハーレム病院（Harlem Hospital）で生を享けた。その子を産んだ20歳にもならない未婚の母親の名は、エマ・バーディス・ジョーンズ（Emma Berdis

Jones)。彼女は、私生子の我が子をジェイムズ・アーサー (James Arthur) と名付けた。3年後の1927年、彼女はデヴィッド・ボールドウィン (David Baldwin) という名の、南部出身で説教師を務める年長の男性と結婚する。ジェイムズ、2歳の時のことだ。こうして、我々が知るのちの作家、ジェイムズ・ボールドウィンはその名を得た。

デヴィッド・リーミング (David Leeming) 執筆の伝記によれば、ボールドウィンは、自身の出自に高校時代にははっきりと気づいていたようで、涙ながらにそれを親友に打ち明けている (31)¹⁾。思春期の彼にとっては、涙を流すほどの悲劇であった出生にまつわる秘密を、後年のボールドウィンは特異な視座として用いていく。リーミングが指摘するように、*Nobody Knows My Name* (1961) あるいは *No Name in the Street* (1972) といったエッセイ集のタイトルは、ボールドウィンが私生児としての出自を転用して、自らを “a mythical or representative persona” へと高めていることをうかがわせる (3)。未婚の母が産み、実父だと思っていた男性が実は継父であることを知ったという個人的体験を普遍化して、アフリカ系アメリカ人にとって歴史的含意を持つ姓の問題へと接続させているのである。というのも、アフリカ系アメリカ人がアメリカで得た姓は白人の奴隷主のものであったという経緯からすれば、それは押し付けられた憎むべき烙印、自らの先祖たちが被ってきたアイデンティティ剥奪とそれに続く苦役の歴史を携えた痕跡であるからだ (“Down at the Cross,” *Collected Essays* 334-35)。こうした歴史をふまえてボールドウィンは、アフリカ系アメリカ人を「西洋の私生児 (bastard of the West)」とまで呼ぶのである (“Autobiographical Notes,” *Collected Essays* 7; “To Be Baptized,” *Collected Essays* 468)。このような局所的、あるいは個人的な事象から普遍的な問題を抽出するボールドウィンの「予言的 (prophetic)」能力 (Leeming 4) を、また別の伝記作者、ジェイムズ・キャンベル (James Campbell) は “hind-second-sight” (4) と呼び表す。これは「hindsight = あとから得た知見」と「second sight = 予知能力」を組み合わせた造語で、一身上の経験や出来事を、社会を覆う大きな問題

へと一足飛びに接続させるボールドウィンの批評眼を表現するものである。ボールドウィンの創作、そしてエッセイの根源をなす想像力と言ってよいだろう。

ボールドウィン一家の来歴もまた、彼ら個人の物語であると同時に、アフリカ系アメリカ人たちの歴史の一部である。母エマは、メリーランド州 (Maryland) に生まれ、1920年代初頭にニューヨーク市へとやってきた。デヴィッド・ボールドウィンも同様に、1920年前後にニューオーリンズ (New Orleans) からニューヨーク市へ北上した。アフリカ系アメリカ人たちの北部大移住の波に、彼らも乗じたのである。ジェイムズも、アフリカ系アメリカ人たちの歴史に触れる機会を持ったが、そうした「生きた歴史」の最たる例は、デヴィッドの母親、バーバラ (Barbara) である。晩年を息子家族のハーレムのアパートで過ごした彼女は、元奴隷であり、14人産んだ子供たちには、白人の主人の子供も含まれていたと伝えられる²⁾。

家族の中でジェイムズに最も大きな影響を持ったのは、継父である。彼は前妻と死別した過去を持ち、そのことをふまえてもエマよりかなり年上であったことが推測される。彼にはこの最初の結婚でもうけた子供たちがおり、長女はエマとほとんど同じ年齢、長男デヴィッド (David) は監獄で亡くなり、最も若いサム (Sam) はジェイムズよりも8〜9歳年長であった。ほどなくして折り合いの悪い父親の下を離れたものの、一時期同じ屋根の下に暮らしたサムのことはジェイムズも覚えており、頼りになる兄と記憶している (Leeming 7; “Take Me to the Water,” *Collected Essays* 356–57)。この次男サムとの関係をふまえると、デヴィッド・ボールドウィン・シニアは、実子であるかどうかにかかわらず、息子たちとうまく関係を築くことができない父親だったのだろう。しかし、ことジェイムズには、つらく当たられたという思いが深く刻み込まれた。折檻や体罰は言うに及ばず、ジェイムズを “the ugliest child he had ever seen” とけなすのであった (Leeming 6)³⁾。

抑圧的な父親が支配する家庭は、困窮した。彼はロングアイランド (Long Island) の工場で働き、週末には説教師をつとめる熱心なキリスト教

信者であった (Campbell 6)。そして同時に、人種差別を含む人生の苦い経験から頑迷になり、白人のことは一切信用せずに嫌悪し、家族に対して独善的で高圧的な家長となった。いかにこの父親がまじめに勤めるも、ときは恐慌期、一家には次々と子供が生まれ⁴⁾、ボールドウィン家は訪問した教師を驚かすほどの困窮ぶりであった (Leeming 16)。早くから読書に目覚めたジェイムズは、片腕で生まれたばかりの弟妹を抱きかかえてあやしながら、もう片方の手に本を持って読書の時間を確保したという。そのようにして彼は、ハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe) の *Uncle Tom's Cabin* (1852 年) とチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の *A Tale of Two Cities* (1859 年) を何度も何度も読んだと回想する。母親は我が子の読書を温かく見守りながらも、視力が落ちるのではないかと心配して本を隠すこともあった (“Autobiographical Notes,” *Collected Essays* 5; Leeming 13)。かたや父親はとでもでないが読書を奨励するようなタイプではなく、家の用事を言いつけられて勉強ができないと返したジェイムズにむかって、“Cease studying” と言い放つような人物であった (Campbell 7)。

父親の影から逃れる術は、家庭外に見出された。学校と教会が、その主要な場である。学校での教師たちとの出会いは、ボールドウィンにより多様な文化へのアクセスを与えた。彼は 1929 年、小学校 P.S.24 に入学する。彼を一目見たある教師が、即座に栄養不良を見抜き、強壮効果のあるタラの肝油を与えたという逸話は、食うにも困るボールドウィン一家の惨状を物語る (Leeming 12)。しかし、学業においてボールドウィンは早くから才覚を現し、この小学校の校長をしていたガートルード・E・アイアー (Gertrude E. Ayer) ——ニューヨーク市で最初のアフリカ系アメリカ人の校長——が特別に目をかけたという (Leeming 13)。

この学校でボールドウィンに特に強い影響を与えたのが、子供たちがビル (Bill) と呼ぶ若い女性教師、オリラ・ミラー (Orilla Miller) であった。彼女との思い出はエッセイ、*The Devil Finds Work* (1976) にて詳細にうかがうことができるが、彼女のような人がいたから「白人のことを心から嫌

いになることができなかった」とボールドウィンは記す (*Collected Essays* 480)。リーミングによれば、中西部出身でリベラルな家庭に育ったミラーは、恐慌期の雇用対策を担った WPA (Works Progress Administration, 雇用推進局) の教育部門に職を得て演劇プロジェクトに携わるなか、セツルメントや公立学校に派遣されていた。アイアー校長の口添えもあって、当時 6 年生のボールドウィンを「アシスタント」としたミラーは、頻繁に彼を WPA の演劇リハーサルスタジオに連れて行った。また、1935 年から 39 年にかけて、オリラはしばしば妹のヘンリエッタ (Henrietta) を伴ってボールドウィン家を訪ね、困窮する家族にあれこれ世話を焼いた。そればかりでなく、彼女はボールドウィンの両親から許可を得て、ジェイムズを映画館や劇場に連れ出したのである。特にボールドウィンの記憶に残ったのが、オーソン・ウェルズ (Orson Welles) がプロデュースした WPA のハーレム演劇団による全黒人キャストの *Macbeth* 公演であった (Leeming 14-17)。ボールドウィンが後に戯曲を書き、様々な映画製作にも携わることを考えると、オリラ・ミラーが与えた影響は計り知れない。

よい教師との幸運な出会いは、ボールドウィンが 1935 年に入学したフレデリック・ダグラス中学校 (Frederick Douglass Junior High School) でも続いた。二人のアフリカ系アメリカ人の教師が特筆に値する。一人は、ハーレム・ルネサンス期から活躍した詩人のカウンティ・カレン (Countee Cullen; 1903-1946) である。彼はボールドウィンにフランス語を教え、また彼を学校の文芸クラブへと誘った。もう一人が、カレンが修士号を取得したハーヴァード (Harvard) 大学出身のハーマン・W・ポーター (Herman W. Porter) である。校内誌 *The Douglass Pilot* の顧問を務めていた彼は、ボールドウィンを編集者に据え、特集記事のリサーチのために彼をミッドタウン (Midtown) の 42 丁目に位置するニューヨーク公共図書館 (The New York Public Library) の本館へと連れて行った。その成果は、同誌 1937 年秋号に掲載されたボールドウィンのエッセイ、"Harlem—Then and Now" に結実した (Leeming 21-23; Campbell 13)⁵⁾。なお、ボールドウィンは公共

図書館 135 丁目分館のションバーグ・コレクション (Schomburg Collection) にも足しげく通って読書に励んだという (Leeming 13)。

ボールドウィン以外の世界との出会いは、こうした幸運な例にばかり恵まれていたわけではない。たとえば、白人警官がふるう人種差別暴力の予先が、わずか 10 歳のボールドウィンに向けられたこともあった。二人の警官が、アフリカ系男性の性的能力にまつわる卑猥な言葉を浴びせながらボールドウィン少年を手荒くボディサーチし、空き地に仰向けに横たわせたまま立ち去ったのである (Campbell 6)。また、中学を卒業した 1938 年の夏、見知らぬ 30 代の男性に性的ないたづらをされるという経験を持つ。思春期のボールドウィンは性の目覚めに押しつぶされそうになっていたが、人種による疎外に加え、性的にも自らが疎外された存在であることに気づき始めていた (Leeming 23; “Freaks and American Ideal of Manhood,” *Collected Essays* 818)。

思春期特有の変化を墮落ととらえたボールドウィンは、神に救いを求めた。宗教に身を投じることは、さらに、その方面における権化であった父親との対決をも意味した。学校の友人、アーサー・ムーア (Arthur Moore) ——*Go Tell It on the Mountain* のエライシャ (Elisha) のモデル (Leeming 24) ——が家族で通っていた教会、Mount Calvary of the Pentecostal Faith に連れて行ってもらったのである。この教会で回心体験を得たボールドウィンは一層宗教活動にのめりこみ、ムーア一家と一緒に Fireside Pentecostal Assembly 教会に移ってからは説教師として活躍した (Leeming 24-25)。父親の得意分野で名声を得ることは、ボールドウィンなりの父殺しの手段であった。事実、中学卒業後は勤めに出よう主張する父親に抗い、ボールドウィンはブロンクスにある名門校にしてカウンティ・カレンの母校、デウィット・クリントン高校 (De Witt Clinton High School) への進学を果たす。周囲の生徒たちはほぼ全員白人であったが、ボールドウィンは校内誌 *The Magpie* に携わるなか、ユダヤ系の学友たちと親交を深めた。特に親しかった 3 人の友人のなかに、エミール・カボ

ーヤ (Emile Capouya) がいた (Leeming 26–27)⁶⁾。

高校時代は、ボールドウィンが説教師として宗教活動にのめりこんだ時期と重なる。宗教の聖と、それとは対照的な学校という俗の二つの世界に生きたボールドウィンは、最終的に教会を離れることになる。この選択にカポーヤの果たした役割は小さくない。なにより彼は、ボールドウィンの人生を方向付ける運命的な出会いの仲介役となった。その相手は、画家ビューフォード・ディレイニー (Beauford Delaney) である。ボールドウィンは、15歳の時のこの出会いを後年のエッセイ “The Price of the Ticket” に記している。カポーヤはグレニッチヴィレッジ (Greenwich Village) で偶然ディレイニーと知り合い、翌日、このアフリカ系アメリカ人の画家に会いに行くよう、ボールドウィンに勧めた。カポーヤに教えられた住所を訪ねたボールドウィンは、すでに名声を得ていた画家の住居兼スタジオに温かく迎え入れられる。それは、ボールドウィンにとって、“Beauford’s colors” に、そして音楽に足を踏み入れる瞬間であった (“The Price of the Ticket,” *Collected Essays* 830–31)。

画家のスタジオには当然絵画作品が並べられており、「色」に迎えられたというのはよくわかる。実際、リーミングは、ボールドウィンがディレイニーから様々なものの見方を学んだと指摘する。それは、単なる視覚の次元を超えて認識の枠組みにかかわるようなレッスンも含まれていた (34)。さらにおもしろいのは「音楽」である。“The Price of the Ticket”によれば、ボールドウィンは、ディレイニーのアパートで “what I had never dared or been able to hear” を、すなわち、“Ella Fitzgerald, Ma Rainey, Luis Armstrong, Bessie Smith, Ethel Waters, Paul Robeson, Lena Horne, Fats Waller . . . Duke Ellington and W. C. Handy and Josh White . . . Franke Newton” らの音楽を “really began to hear” したのである (*Collected Essays* 831)⁷⁾。本研究においてのちに検討するが、音楽——特にアフリカ系アメリカ人の音楽伝統——はボールドウィン文学と深いかわりを持つ。その音楽との出会いは、ビューフォード・ディレイニーとの出

会を通じて果たされたのである。

ディレイニーとはその後長いつきあいになるが、ボールドウィンにとって彼は “the first walking, living proof, for me, that a black man could be an artist” であった (“The Price of the Ticket,” *Collected Essays* 832)。しかし、それだけではない。ボールドウィンが彼と出会ったのは 1940 年のことで、1901 年生まれのディレイニーがボールドウィンにとってちょうど父親くらいの年齢であったタイミングだ。自らの家庭では得ることができないでいた、信頼できる父親の姿をボールドウィンがディレイニーに見出したとして、何ら不思議はない。ディレイニーのスタジオで聞くジャズやブルースが、継父デヴィッドが支配する家では禁じられた音楽であったということは、前者の俗と後者の聖の対比が、文化と宗教の関係にそのまま重なるということだ。対照的な二人の父親像は、ボールドウィンが選択すべき将来の二つの道を指し示していたことになる。ボールドウィン本人も、文化と宗教を二つの異なった世界ととらえていた節がある。本人の回想によれば、説教師を始めて翌年には信仰に揺らぎが生じていたが、それはやめていた読書を再開した時期と一致したというのだ (Leeming 27)。

1941 年の終わりにボールドウィンは説教壇を離れることになるが、この際にもカポーヤが決定的な役割を担った。そもそもボールドウィンは、ほどなくして教会内の欺瞞に幻滅するのみならず、信仰への情熱は自身のセクシュアリティを抑圧して覆い隠す方便にすぎないということにも気づき始めていた (Leeming 28; Vogel 105–06; Baldwin, “To Crush a Serpent,” *The Cross of Redemption* 159–60)。そのような信仰の悩みを打ち明けられる相手が、カポーヤであった。“To stay in the church merely because I was afraid of leaving it was unutterably far beneath me, and too despicable a cowardice for him to support in any friend of his” というこの親友の助言もあり、ボールドウィンは教会から離れる決意をする。最後の説教を終えたボールドウィンは教会をあとにし、待ち合わせていたカポーヤと連れ立って劇場へ直行し、オーソン・ウェルズが監督した *The Native Son* を観

劇したという。これが、ボールドウィンが後年に回顧録かつ映画論である *The Devil Finds Work* (1976) に記したことの顛末である (*Collected Essays* 502-03)。ところが、ジェイムズ・キャンベルによれば、ここにもボールドウィン特有の脚色があるという。というのも、ボールドウィンは自身の教会離反の詳細を複数回公の場で語っており、1960年代半ばのファーン・マージャ・エックマン (Fern Marja Eckman) とのインタビューでは、カポーヤではないある友人と偶然出会って *HMS Pinafore* のマチネに向かったと語っているからだ (Campbell 22-23)。いずれにせよ、“a nonreligious Jew”であったカポーヤの存在や助言が、ボールドウィンの決意に与えた影響は少なくないことは確かだ (Leeming 31)。

1941年、家庭や教会での悩み事もあり、ボールドウィンは一年遅れて高校を卒業する。高校のアルバムにおいて、彼は、自身の将来の夢を“a novelist-playwright”とした (Leeming 28-29)。ボールドウィンは、継父＝教会＝宗教ではなく、ディレイニー＝学校＝芸術・文化の道を選び、足を踏み出したのである。

グレニッチヴィレッジ時代 (1941-1948年)

ボールドウィンは、高校の校内誌、『マグパイ』に短編、詩、戯曲を定期的に寄稿していたが、文筆業のキャリアを軌道に乗せるまでには、多年を要した⁸⁾。事実、第一長編の *Go Tell It on the Mountain* が出版されるのは1953年のことであるし、一般誌への初原稿掲載も1947年まで待たなくてはならない。おおまかにグレニッチヴィレッジ時代と呼べる高校卒業後の時期は、辛い作家修業時代であり、かつ人生経験を積んだ時代であった。ボールドウィンはのちに、自らのヴィレッジ時代をふりかえって、“my season in hell”と呼び表している (Leeming 49; “Freaks and American Ideal of Manhood,” *Collected Essays* 823)⁹⁾。

高校卒業後、シティー・カレッジ (City College) への進学も心の片隅に

持ちながら、一家の経済状態を考えると、それは現実的な道ではなかった。継父デヴィッドの健康問題も浮上した。彼は職を失い、特に生活が厳しくなるにつれて精神に異常をきたし、1943年に精神病院へと収監されると、7月29日にはその病院で結核のために亡くなっている。しかし、まさにその日、エマはジェイムズにとっての末の妹となるポーラ (Paula) を産む。デヴィッドの皮肉な忘れ形見である。葬儀はジェイムズの誕生日にあたる8月2日に執り行われたが、それはハーレム暴動が勃発した日でもあった (Leeming 7, 41)¹⁰⁾。

この時期のボールドウィン、家族を支える義務と自身の創作に向き合うための時間をつくることの板挟みに悩んだ。社会に出て露骨な人種差別に遭うのも、この時期のことだ。ボールドウィンが従事した仕事には、ニュージャージー (New Jersey) のベルミード (Belle Mead) での軍需工場の仕事が含まれる。線路敷設の肉体労働であったが、支払いはよかった。高校時代の親友、カポーヤが先にこの仕事に就き、ボールドウィンを誘ったのである。カポーヤに倣って、ボールドウィンも付近の町、ロッキーヒル (Rocky Hill) にあるカポーヤの友人のアイルランド系のカップルの家に泊まり込んで、仕事に通った。しかし、その仕事に打ち込むということではなく、友人のカポーヤの目にも、怠けていると映った (Campbell 23-24)。

エッセイ、“Notes of a Native Son” に描かれる、レストランでの一件もこのニュージャージー時代に起きた。ニュージャージーにはジム・クロウ (人種隔離) 制度が定着しており、最初はそれに気づきすらしなかったボールドウィンの精神をも、すぐに蝕んでいった。ボールドウィンは人種隔離の現実直面して硬直化する自分の心持ちを、“chronic disease”あるいは“blind fever”と表現している (“Notes of a Native Son,” *Collected Essays* 70)。この憤怒はほどなくして爆発した。ある晩、トレントン (Trenton) の町の、皮肉にもアメリカン・ダイナー (The American Diner) と名付けられたレストランで、ボールドウィンは、給仕を拒否される——“We don’t serve Negroes here”というお決まりの、そして彼がニュージャージーで何度か投

げかけられてきたフレーズによってである。連れの白人の友人と通りに出たボールドウィンは、“a physical sensation, a *click* at the nape of my neck”を感じた。怒りをぶつけるべく、一人さ迷い歩いて高級レストランにあえて入店した彼を待っていたのは、やはり、「黒人には食事を出さない」の言葉。彼は怒りに任せて水の入ったマグを女性店員に投げつける。本当に彼女のことを傷つけてやりたいという気持ちに支配されて、我を失っていたのである。マグは店員には当たらなかったが、当然店内では騒動が勃発し、何度か男性店員に殴られながらも、どうにか彼は店を逃げ出す。そこに駆け付けた白人の友人の助けもあって、ボールドウィンは逃げおおせる。この事件を振り返ってボールドウィンは、自分は殺される可能性もあったが、方や自分も相手のことを殺してやろうと思っていたことに思い当たる (*Collected Essays* 70-72)。肌の色（人種）が白人側に反射的に持たせる、そして人種隔離が差別される側に鬱積させる激しい憎悪は、それほどのものであった。ボールドウィンはこのことを、身をもって知ったのである。

その後もボールドウィンは職を転々とするが、どれも長続きしない。次第に酒量は増え、悩みに押しつぶされそうになった彼は、以降何度か体験することになる、神経衰弱の状態にまで陥る (*Leeming* 42)。悩みを打ち明けたボールドウィンに、ビューフォード・ディレイニーは的確なアドバイスをする。ボールドウィンは優先順位をつけて家族を離れる決心をつけ、グレニッチヴィレッジでの生活を始める。ディレイニーや友人宅を転々としながら、日銭を稼いだのであるが、そのうちに、ディレイニーが紹介してくれたトリニダード (Trinidad) 出身のコニー・ウィリアムズ (Connie Williams) のレストラン、カリプソ (Calypso) でウェ이터をするようになる (*Leeming* 43)。

ボールドウィンはこのカリプソに集う若者たちと、典型的な異性愛の範疇には収まらない多様な性的志向を許容するヴィレッジのボヘミアンな生活を享受する。しかし、それですべてが解決したというわけではない。こ

の時期のボールドウィンは、いまだ自身のセクシュアリティを正面から受け入れられていたわけではなかったからである。男性たちと一夜限りの関係を持ちながらも、白人女性を含む複数の女性と交際し、結婚を考えることすらあった。リーミングによれば、ボールドウィン自身、特に惹かれた男性とは性的関係を持たないようにしたという。ボールドウィンは、女性的な男性に惹かれることはなく、相手に選ぶのは完全に同性愛者として生きるとはしていない男たちであった。そうした男たちから見ると、背骨の問題から女性っぽい歩き方をする小柄なボールドウィンは女性的に映る。えてしてそうした男たちは、一夜の同性愛体験の恥辱を相手のボールドウィンを攻撃的に貶めることで解消しようとした (Leeming 43-45)。ヴィレッジといえども、安定した幸せなゲイカップルの生活は現実のものではない時代だったのである。ボールドウィン自身、自分の同性愛志向をいまだ直視できてはおらず、また、長続きする幸せな同性愛関係は望むべくもないものであった。

この時期、ボールドウィンが片想いを寄せたのがユージン・ワース (Eugene Worth) である。ボールドウィンは彼に 1943 年の 12 月に会おうが、その 3 年後の 1946 年 12 月にこの黒人青年は自殺をする。ジョージ・ワシントン橋 (George Washington Bridge) から身投げをしたのである。性行為を持つことがその男性との関係に破滅をもたらすのみであることを経験的に知っていたボールドウィンは、ワースとの関係を性的要素を含まない友人関係に留めておこうとしたし、そもそもワースは完全にストレートであった。しかし、そんなワースが半ばボールドウィンへの愛を告白したときにすら、それを受けとめることはできなかった。後年、ボールドウィンは、自分がその時に異なった対応を取っていたならばワースを救うことができたのではないかと、しばしば思い悩むことになる (Leeming 46)。

ワースの自殺は、ボールドウィンにとって他人事ではなかった。自身の性的志向に悩み、家族を見捨てている状況を悔やみ、そして文筆は思うようにはかどることはない。ボールドウィン自身、自殺を考えることすらあ

ったという。ヴィレッジ時代をふりかえって「地獄の季節」と呼び表す理由は、こうしたところにあるのだろう (Leeming 49)。

その辛い時期に、いくつかの幸運な出会いもあった。ボールドウィンがウェ이터をしていたカリブソには白人、黒人の別なく文化人が集まったが、その顔ぶれには、ディレイニーはじめ、ヘンリー・ミラー (Henry Miller), C・L・R・ジェイムズ (Cyril Lionel Robert James), クロード・マッケイ (Claude McKay), アレイン・ロック (Alaine Locke), ポール・ローブソン (Paul Robeson), マルコム X (Malcolm X), パート・ランカスター (Burt Lancaster), マーロン・ブランド (Marlon Brando), アーサ・キット (Eartha Kitt) が含まれた。また、ヴィレッジの他の店でボールドウィンは、ジャック・ケルアック (Jack Kerouac) やアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg) といったビート世代の文筆家たちと顔を合わせることもあった (Leeming 44)。

特に俳優のマーロン・ブランドはボールドウィンにとって特別な存在であった。ボールドウィンがブランドに出会ったのは 1944 年の春のこと。当時のボールドウィンは劇作家になる夢を持っており、俳優を志す気持ちすら心の片隅にあった。そうした思いから通ったニュースクール (New School) の演劇クラスで出会ったのが、ブランドであった。ブランドとの親交は、以降長く続く (Leeming 46)。ボールドウィンが後々演劇や映画にも携わっていくなか、ブランドはしばしば彼の助言役となった。

苦い思い出としてボールドウィンのなかで燻り続けることになるユージン・ワースとの関係もまた、僥倖をもたらした。ワースの影響で、ボールドウィンは左翼団体、Young People's Socialist League に出入りするようになる。このような特定のイデオロギー的運動に加担することは、ボールドウィンにしてはごく珍しい機会であった (Leeming 46)。しかし、1946 年のワースの死後、彼の紹介で参画した社会主義運動を通じて知り合ったリベラルな文壇関係者から、仕事をもらえるようになったのである。*The New Leader* のソル・レヴィタス (Sol Levitas), *The Nation* のランダル・ジャレル (Randall Jarrell), *Commentary* のエリオット・E・コーエン (Elliot

Ettelson Cohen) や ロバート・ワーショー (Robert Warshaw), *Partisan Review* のフィリップ・ラーヴ (Philip Rahv) といった編集者たちだ。ボールドウィンのプロの文筆家としての最初の原稿は、1947年4月12日号の *Nation* 誌に掲載された、ゴーリキー (Maxim Gorki) の書評である (Leeming 50)。また、彼は、定期的に書評を *The New Leader* に発表する機会も与えられた。1948年に *Commentary* に掲載された “The Harlem Ghetto” を皮切りに、エッセイも続々と雑誌の紙面を飾るようになる。

こうした編集者たちにもまして大きな影響をボールドウィンに与えた出会いは、リチャード・ライト (Richard Wright) とのものにほかならない。リーミングによれば、その出会いは1944年の冬に、エスター (Esther) という若い女性を通じて実現した。その年にボールドウィンは、高校時代の友人、ブラッド・バーチ (Brad Burch) とその妻クレア (Claire) とともに *This Generation* と題された文芸同人誌を立ち上げる。ボールドウィンは同誌に詩や、*Go Tell It on the Mountain* の初期段階である “In My Father’s House” —— “Crying Holy” という仮題でも知られる——という短編小説の一部分などを発表していた。エスターは、ボールドウィンがある機会に朗読した “In My Father’s House” の抜粋に感銘を受け、彼をライトに引き合わせたのだという (Leeming 49–51; Campbell 29–30)。

ブルックリン (Brooklyn) の自宅にボールドウィンを招いたライトは、小説家志望の16歳年下の若者に可能性を認めた。ハーパー (Harper and Brothers) 社の自身の編集者であるエドワード・アズウェル (Edward Aswell) を介してボールドウィンを Eugene F. Saxton Foundation Fellowship というグラントへ推挙したのである。ボールドウィンは、500ドルを1945年11月に授与される (Leeming 49–50)。

ボールドウィンは、カリブソで働いていた時に執筆のスタイルを確立したという。リーミングによれば、夜カリブソでの仕事を終えたボールドウィンは、そのままディレイニーやほかの友人たちと遅くまでお酒を飲みながらおしゃべりを続け、帰宅後、連れがいなければ疲労と眠気に耐えられ

なくなるまで数時間執筆をしたという。この執筆スタイル——というか生活スタイル——は、ボールドウィンが作家としての地位を確立したのちも変わることがなかったようだ (47)。

このようにして “In My Father’s House” を書き進めたのであるが、グラントを授与されながらもなかなか思うようには執筆ははかどらず、ハーパーに出版は難しいとの宣告を下されてしまう (Leeming 50)。後年のボールドウィンは、自分が直面していた執筆の壁が、自らのセクシュアリティを完全には受け入れられないでいた自身の葛藤そのものであったことを理解するようになったという。ボールドウィンは、自分のセクシュアリティをより深く探求するための客観的視座、つまりは自己をふりかえって見つめるための距離をまだ見出せないでいた。それは、父子関係についてもあてはまる。継父との困難な関係を題材として選びながらも、それを真正面から見据えることはまだできていなかったのである (Leeming 53)。

そんなボールドウィンに決定的な転機が訪れる。彼は、高校時代の友人、リチャード・アヴェドン (Richard Avedon) を通じて、1946 年の春に写真家セオドア・ペラトウスキー (Theodore Pelatowski) と知り合う。二人は、ハーレムの宗教生活を題材にエッセイと写真を織り交ぜたドキュメンタリ作品を協業するプロジェクトを立ち上げる¹¹⁾。プロジェクト自体は未完に終わったものの、ボールドウィンは Rosenwald Fellowship を得る。彼は、そのグラントをフランス行きの航空券購入にあてた。1947 年にフランスに移住を決めたりチャード・ライトを追いかけるようにして、1948 年 11 月、ボールドウィンはパリへ旅立つ (Leeming 54-55)。

Notes

- 1) ファーン・マージャ・エックマン (Fern Marja Eckman) によれば、ボールドウィンは幼少時のある機会に自身の誕生年が母親の結婚に先立つことを発見していたという (37-38)。
- 2) ドキュメンタリ映画作品 *I Heard It Through the Grapevine* (1982) に収められたジェイムズ・ボールドウィンと弟デヴィッド (David) の会話にお

- いて、このおじのことが語られているという (Pavlić 103, 118)。
- 3) 1985 年に発表されたエッセイ “Freaks and American Ideal of Manhood” において、ボールドウィン は継父から受けた体罰を述懐している。お使用に出かけ、あずかったなけなしのコインをなくしてしまったジェイムズを、彼は鉄製のコードで殴り続け、半ば気絶するほどであったという (*Collected Essays* 818; Vogel 55)。
 - 4) 弟妹たちは以下のとおりである。ジョージ (George, 1927 年生まれ)、バーバラ (Barbara, 1929 年生まれ)、ウィルマー (Wilmer, 1930 年生まれ)、デヴィッド (David, 1931 年生まれ)、グロリア (Gloria, 1933 年生まれ)、ルース (Ruth, 1935 年生まれ)、エリザベス (Elizabeth, 1937 年生まれ)、ポーラ (Paula, 1943 年生まれ) (Eckman 39)。
 - 5) 本エッセイはエックマンに転載されている (53–55)。
 - 6) 他の二人は、リチャード・アヴェドン (Richard Avedon) とソル・スタイン (Sol Stein) であった。アヴェドンは著名な写真家に、カポーヤとスタインは編集者になる。後年、ボールドウィンとアヴェドンは *Nothing Personal* と題されたポートレート集を 1964 年に共同出版している。
 - 7) 斜体強調は原文のとおり。以下同。
 - 8) 『マグパイ』掲載のボールドウィン作品については、キャンベル (15–19)、リーミング (29–30) を参照のこと。キャンベルは、ボールドウィンの当時の詩、 “Black Girl Shouting” を再録している (16)。
 - 9) フィールド (Field) は「地獄の季節」を、フランスの詩人、アルチュール・ランボー (Arthur Rimbaud) の詩集への言及であると指摘する (30)。
 - 10) エックマンによれば、ボールドウィンは自分の誕生日と父親の葬儀が同日であったと語る傾向にあるものの、実際には葬儀は前日の 8 月 1 日に執り行われた (95–96)。
 - 11) ペラトウスキーは全くのストレートでボールドウィンとの関係を性的なものへと変えようとは考えなかったものの、ボールドウィンのほうはペラトウスキーに強く惹かれ、のちに「自分の最初の恋人」とすら発言したという。ペラトウスキーは *Giovanni's Room* のジョーイ (Joey) のモデルにもなったとされる。二人は長く友人であり続ける (Leeming 54)。

参考文献

- Baldwin, James. *Collected Essays*. Library of America, 1998.
- . *The Cross of Redemption: Uncollected Writings*. Edited by Randall Kenan, Pantheon Books, 2010.
- Campbell, James. *Talking at the Gates: A Life of James Baldwin*. Viking, 1991.
- Eckman, Fern Marja. *The Furious Passage of James Baldwin*. M. Evans, 2014.

- Field, Douglas. "Greenwich Village and Emerging Bohemianism." *James Baldwin in Context*, edited by Quentin D. Miller, Cambridge UP, 2019, pp. 28–36.
- Leeming, David. *James Baldwin: A Biography*. Henry Holt, 1994.
- Pavlić, Ed. *Who Can Afford to Improvise?: James Baldwin and Black Music, the Lyric and the Listeners*. Fordham UP, 2016.
- Vogel, Joseph. *James Baldwin and the 1980s: Witnessing the Reagan Era*. U of Illinois P, 2018.